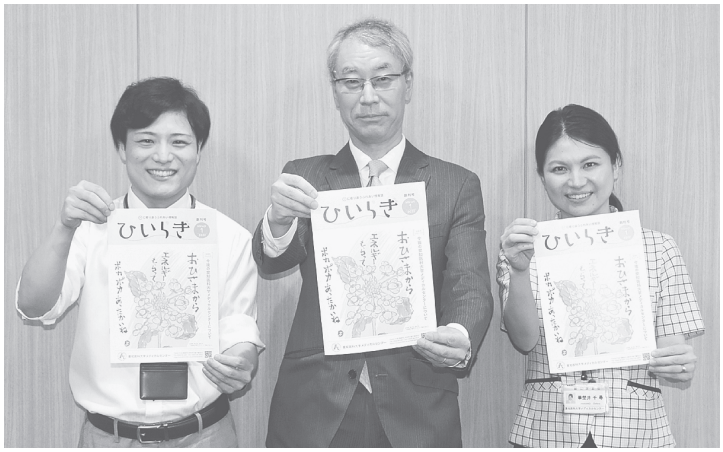
身近な媒体に

岡崎・愛知医科大学メディカルセンター 病院広報誌「ひいらぎ」創刊

岡崎市仁木町の愛知医科大学メディカルセンターの病院広報誌「ひいらぎ」がこのほど、創刊した。昨年四月の開院から一年が経過し、地域密着の医療を目指す同センターにとって、患者や地域住民らと病院とを結ぶ身近な媒体として位置付けている。春秋の年二回発行だが、病院関係者は「（患者・地域住民らと病院で）双方向のやりとりができ、一つのコミュニケーションツールになれば」と期待を寄せている。（竹内雅紀）



病院広報誌「ひいらぎ」をＰＲする加藤副院長（中央）ら
愛知医科大学メディカルセンターで

院内の医師や看護師、事務職らさまざまな部署の約二十人で構成される広報委員会は昨年九月に設立された。まずは「病院案内」の冊子、その後に広報誌を作成することが使命だった。

「ひいらぎ」（花言葉は用心深さ、先見の明、保護）は病院職員の公募と投票によって決まった。長久手市にある本院（愛知医科大学病院）で発行されている病院広報誌が「たちばな」のため、分院である同センターも植物の名前になった。

各部署の協力で成立

創刊号の内容は毎月一回の打ち合わせで固めていった。羽生田正行院長のあいさつをはじめ、新型コロナウイルス感染後の後遺症外来や心臓リハビリテーションといった同センター独自の取り組み、健康レシピ、ワンポイントアドバイスなどが載っている。各部署の職員の協力で成り立っているという。また、表紙には院内にも数々飾られている絵手紙スケッチを描くグループの作品を採用した。

広報委員長を務める加藤義郎副院長（五二）＝糖尿病内科＝は「病院の情報や暮らしに役立つ情報はもちろん、より身近に感じてもらうため、患者さんなどからの作品（俳句や短歌、写真など）も広く募集している」と述べる。自身も創刊号の「わたしの〇〇自慢」のコーナーに愛犬を登場させた。

Ａ４判八ページ、カラー印刷。三千部発行。待合室など院内八カ所に置いてあるほか、医療関係機関や会合時などに持参して配布もする。問い合わせは、同センター事務部総務課（66―2826）へ。